

犯人は？ニホンイシガメを緩やかに減少させる外来種

西堀智子・加賀山翔一・松本健二・長谷川雅美
(爬虫両生類情報交換会・千葉県ニホンイシガメ保護対策協議会)

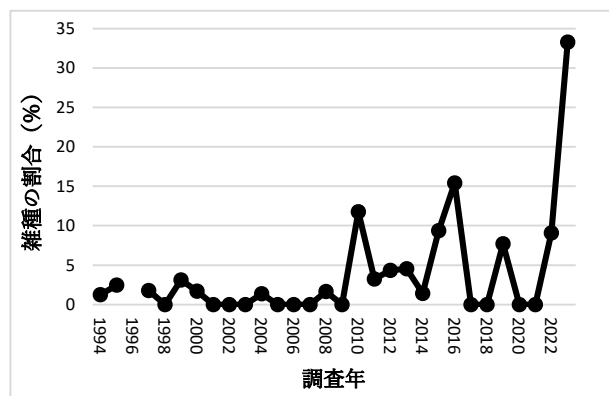
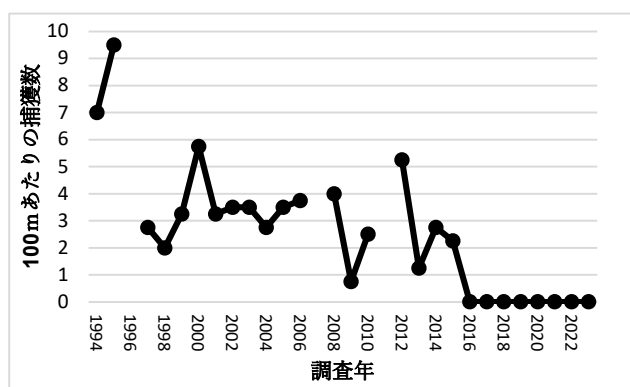
爬虫両生類情報交換会は爬虫両生類に関する知識の普及と会員相互の情報交換を目的に 1973 年に設立された会で、爬虫両生類を対象とした研究会や愛好会・同好会の類では日本で最も歴史が古い。会が主催する「南房総イシガメ観察会」はニホンイシガメの生息状況を調査するため、房総半島南部のある地域を選定し、1991 年に開始され、現在に至るまでおよそ 1 年に 2 回ペースで行われてきた。この観察会はカメ類の標識調査による生態研究の第一歩となり、後に千葉県をはじめとしてカメ類の野外調査が広まるきっかけとなった。

観察会では複数の河川やため池でカメ類の捕獲調査を行ってきたが、今回約 30 年間コンスタントに調査を続けてきた川 A 源流・上流のニホンイシガメがいかに減少したかを示す。その原因は複数あり、急激な減少を招いたものとしては商業のための乱獲とアライグマの食害があげられる。一方、緩やかではあるが確実に減少に関わったものとして里山環境の荒廃と水辺の外来種クサガメがあげられる。

クサガメ外来種説については魚類研究者からの指摘もあって、まだ決着はついていない。しかし近年ペットとして輸入された中国大陸系の個体が広がったと考えられる関東地方のクサガメについては外来種として扱われることが妥当である。

川 A では調査開始当初からクサガメとニホンイシガメの雑種が見つかっており、かなり以前からニホンイシガメはクサガメによる影響（遺伝子攪乱と繁殖干渉）を受けており、クサガメがいない環境に比して再生産の効率が悪くなっていったと考えられる。右下のグラフは川 A 源流・上流でのカメ類の全捕獲数に占める雑種の割合の推移である。クサガメを排除しているにもかかわらず、雑種の割合は減らず、むしろ近年はニホンイシガメの乱獲やアライグマの影響もあって急激に増えている。

また川 A 源流部と上流部・近年調査するようになった中流部を比較すると、クサガメは流速の速い源流より上流、上流より中流で多く捕獲されている。雑種も同様の傾向があるが、流速の速い場所での捕獲数はクサガメよりかなり多い。これはニホンイシガメの特徴を獲得した雑種が河川をどんどん遡って生息域を広げた結果と考えられる。



図左：川 A 源流の 100m 当たりのニホンイシガメの捕獲数の推移（春の観察会）

図右：川 A の上流・源流で捕獲されたカメ全個体に占める雑種の割合の推移